

微睡まじろみの中で

耳元で小さく囁かれるこの男の声音が、ランガは好きだった。不思議な安心感を与えてくれる。

うつすらと目を開ける。ぼやけた視界に見下ろしてくる人影をとらえた。

愛抱夢？

が、すぐに瞼を閉じる。

まだベッドから離れたくなかった。もう少しこうしてブランケットに包まれぬくぬくしていたい。

愛抱夢が声もなく笑っていることが、わかった。

彼の指が額にかかる髪に触れる。湿った吐息が頬を掠めると同時に囁かれた。

「まだ夢の中なのかな？ ランガくん」

ああ駄目だ。そんな耳元で喋られたら……もう、目が覚めてしまう。少し気を利かせて欲しかった。なんか悔しい。ムカつく。

だから応えない。目は、わざと開けてやらない。

「まあ、まだ早いから寝ていてもいいけどね」

そうだよ。カーテンの隙間から早朝の光が漏れる様子はない。まだ夜明け前だ。そうに
違いない。多分だけど。

愛抱夢の指が額にかかった髪をどける。

髪を梳き目尻から頬へと滑る指を感じた。触れるか触れないかギリギリで肌を撫でる指
の感触はこそばゆい。

エスカレートしなければ放っておけばいい。

あたたかい手のひらが頬から顎へかけての輪郭を包み込む。やがて手のひらは首から胸
へと滑っていった。

パジャマの前立てから胸へ、するりと入り込んだ指の動きに別の意図を感じ、ランガは
反射的にその手を払い除け、パチつと目を開けた。

「もう」

思わず、きつと睨み付けたランガに、愛抱夢は目を丸くした。

「おやおや、その目。今、目覚めたわけではなさそうだね。いつから起きていたの？」

「少し前」不機嫌そうな声が出てしまった。

「狸寝入りとは、悪い子だ」

「狸？」

「寝たふりをするって意味」

愛抱夢はうつすらと笑んだ。

起きあがろうとするランガの背中を大きな手ひらで支え、愛抱夢は自分の胸に抱き起こした。

「大人をからかうなんて、君はスケートに限らず怖いもの知らずだ」

「からかったわけじゃない」

ランガは不満そうに唇を尖らせた。

ただ、眠っているわけでも目覚めているわけでもない、あのふわふわとした感じが心地よくて名残惜しかった。まだ微睡まどろみの中に漂っていただけだった。

不意に顎が掴まれ持ち上げられた。至近距離から深紅の瞳が覗き込む。

「ふーん、そうなんだ」

見透かしたような目をランガに向け、愛抱夢は目を細めた。顔が近づき唇と唇が一瞬重なる。そしてランガの頭を抱き、そのまま後ろに倒れ込んだ。

「ねえ、なにをするの？」

愛抱夢の胸に頭がすっぽりと収まり、身じろいで形だけ抵抗する素振りを見せるが、拘束する腕の力が強くなるだけだった。

フフフ……と小さく笑う声が聞こえる。

「起こしてしまつて悪かつたね。こうしていてあげるから、もう少し眠っていていいよ」眠っていていいよつて、もうすつかり目は覚めてしまったの？

それでも男の胸で聞く静かで、それなのに決して反論を許さぬ声音は心地よい。トクントクンと規則正しく打ち付ける胸の鼓動に耳を澄ます。

全身の力がゆつくりと抜けていくのを感じ、ランガは諦め目を閉じた。

《了》